

続・ 珈琲の思い出十六

「優子さん、上のお名前、鈴木さん、つておっしゃるんですね。」

私が載っている新聞記事を広げながら和樹が言った。

「はい・・・、もうこういう新聞って年齢まで載せられちゃうから困っちゃう。あ、あの、佑樹君のお父さんは・・・もし良かったら、お名前はなんておっしゃるんですか？」

「僕は入沢和樹【いりさわかずき】と言います。もうすぐ43歳だから、優子さんより9歳年上のおじさんですね・・・。」

「いえ！そんな！おじさんだなんてとんでもない！和樹さんいいお名前ですね。」

私は心の中で【和樹】という名前を大事に転がしてみた。

「あの・・・僕ですね、失礼ながら優子さんにお子さんがいらっしゃることを知りませんでした。あんまりお若く見えるから独身なのかな・・・と。」

私はなぜだかこの話題が一番切り出されたくない話題のように感じて、胸が苦しくなった。

自分が独身であればどんなにか気が楽だろう・・・。

「まあ、お上手ですね、ありがとうございます。」

「いや、正直言ってショックでした。あははは・・・。」

和樹の声が裏返った。これはどういう意味なのだろうか？

「和樹さんは・・・、あ、ごめんなさい、私、あの和樹さんって呼びしてもいいのかしら・・・。」

「どうぞ、どうぞ！もちろんですよ。嬉しいなあ。」

和樹、なんていい名前なのだろう。彼の名前が私の心の中で希望のように明るく灯った。

(続)

鈴木優子